

琉球大学学術リポジトリ

台湾(高雄市)における日本語教育実習の報告

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2013-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加納, さおり, 田口, 望, 福島, 千秋, 宮城, 彩香, Kano, Saori, Taguchi, Nozomi, Fukushima, Chiaki, Miyagi, Ayaka メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/26534

台湾（高雄市）における日本語教育実習の報告

加納 さおり・田口 望・福島 千秋・宮城 彩香

1. 実習機関および実習対象者

文藻外語学院は高雄市にある台湾で唯一「外語学院」を看板に掲げる大学であり、外国語教育に力を入れていることで知られている。日本語教育は1990年に開始され、大学部と高専部があり、現在約1500人の学生が日本語専攻クラスで学んでいる。最終学年では、卒業公演として日本語劇を披露するほどの実力を身につけている。教師は、専任と非常勤の55人で構成されており、そのうち13人が日本人である。

2. 日程および費用

現地への往復には、飛行機（那覇空港～台北国際空港）、リムジンバス（空港～桃園）、高速鉄道（桃園～左営）、タクシーを利用した。所要時間は片道5時間程度であった。

現地滞在は2012年9月3日～9日の7日間で、期間中ずっと学内宿舎に宿泊した。今回実習生4名が泊まった部屋は一泊500元（約1300円）という手頃な値段であり、本来講師用の宿舎であるため個室にシャワー、トイレ、エアコン、冷蔵庫等が完備され快適に過ごせた。

交通費、宿泊費、食費にお土産代なども含めて実習生の負担金額は総額8万円程度だったので、滞在期間を考えると割安であった。

実習の日程は下記のとおりである。

	4日(火)	5日(水)	6日(木)	7日(金)
9:00-10:00	実習準備・点検 (60分)	実習準備・点検 (60分)	実習準備・点検 (60分)	実習準備・点検 (60分)
10:10-10:55	実習①(45分)	実習⑤(45分)	実習⑨(45分)	実習⑬(45分)
11:05-11:50	実習②(45分)	実習⑥(45分)	実習⑩(45分)	実習⑭(45分)
	<昼休み>	<昼休み>	<昼休み>	<昼休み>
13:20-14:05	実習③(45分)	実習⑦(45分)	実習⑪(45分)	交流会&沖縄紹介プレ ゼンテーション(90分)
14:15-15:00	実習④(45分)	実習⑧(45分)	実習⑫(45分)	
15:30-17:00	フィードバック (90分)	フィードバック (90分)	フィードバック (90分)	

表1 実習期間の時間割

3. 実習内容について

3-1. 学習者

今回の実習に協力してくれた学生は、9人が日本語学科の5年生（日本の高専の5年生に相当）と、大学4年生に相当する2名の計11人であった。そのうち男性は1人であった。彼らの日本語学習歴は4～5年であった。

3-2. 実習内容

初日	実習①読解	加納	1人ずつ本文を音読させ、発音を確認・練習させた。文型・語彙の説明と確認の後、各自で例文作成させた。 本文の内容確認問題を解かせ、台湾の「地理」「食べ物」「天気」「生き物」「行事」をテーマにグループで作文を製作・発表させた。
	実習②発展	福島	
	実習③文法	宮城	待遇表現（敬語）3つの場面を設定し、スクリプトを作成、スクリプトを読む練習し、授業を理解したか確認のための練習問題を3問解かせた。
	実習④会話	田口	敬語を使うべきシチュエーションを与え、ペアワークとして会話練習を行い、各ペアで発表させた。
2日目	実習⑤読解	宮城	1人ずつ本文を音読させ、単語の確認・発音練習をし、文型・語彙の練習問題を解かせた。 台湾料理の写真を使って、ヒントとしてその特徴を自由に発話させ、その料理が何であるかを当てるというゲームを行った。
	実習⑥発展	田口	
	実習⑦文法	加納	受身・使役受身の場면을提示。動詞の活用をフラッシュカードで確認した後、練習問題を解かせた。
	実習⑧会話	福島	受身・使役受身を使い、「過去または、最近あった嫌なこと」をペアで会話形式の文を製作・発表させた。
3日目	実習⑨読解	福島	1人ずつ本文を音読させ、発音を確認・練習させ、本文の内容確認問題を解かせた。 日本語とウチナーヤマトグチの「～はず」の相違をスキットで説明した。
	実習⑩発展	加納	
	実習⑪文法	田口	普通体のテキストを音読させた。実際に日本人の普通体での会話を聞かせ、日本人らしい仕草などを見せた。
	実習⑫会話	宮城	ペアを作り、5つの会話の話題について選択肢の中から好きな話題を選び、5分間その話題について話させた。その後、各ペアで順に発表させた。
4日目	実習⑬読解	田口	台湾独特の妖怪について発表させた。 本文を音読させ、単語の発音確認し、本文の内容を説明した。 台湾の贈り物の吉凶について列挙し、説明させた。 日本の行事・慣習について紹介した後、台湾のそれらについて説明させた。
		宮城	
		福島	
	実習⑭発展	加納	

表2 実習の内容

4. 実習を終えての感想

4-1. 法文学部4年 福島千秋

私は今まで不特定多数の人の前で何かを教えるということをしたことがなかったため、台湾実習が初めての教育経験だった。8月上旬から始まった実習準備は、一緒に実習をするメンバーで何度も集まり、計画を立てた。模擬授業が始まってからも話し方を改めたり、授業の進め方を変更したりした。準備期間の1カ月の中で、模擬授業は最後の1週間のみだったが、その期間で気づかされることはとても多かった。

台湾での実習1日目は、本文の確認問題と発展の文章作成を担当した。確認問題を回答した後、台湾の「地理」「食べ物」「天気」「生き物」「行事」からテーマを選び、グループで作文を作成させ、発表させた。初めて教壇の前に立ったため、緊張してしまい、口調も早口になったうえ、落ち着いて学習者の反応を確認することができなかった。そのため、学習者が予想よりも高レベルであった場合の対応を用意していたにも関わらず、その対応を取ることができなかった。また、時間配分を誤ったこともあり、後半の作文製作と発表にうまく時間が割けず、時間を超えてしまった。

実習2日目は、会話を担当した。受身・使役受身を使って、「過去または、最近あった嫌なこと」をテーマにペアで会話をさせ、前で発表させた。1日目の全体の様子から、学習者のレベルが高く、作文や会話練習に慣れていることが分かったため、全ペアが発表できるように時間を確保し、各ペアが発表した後、それぞれの良かった点、または訂正箇所を指摘した。私は1日目の反省を胸に、落ち着いて学習者と接することを念頭に置いた。学習者に任せた進みになることに不安を抱いていたが、1日目の田口さんの授業を参考に、予想していたよりも円滑に進めることができた。

実習3日目は、本文の音読と内容確認問題を回答した。方言についての内容だったため、本文に記載されていた標準語から方言への規則的な変化の説明や地図を使っての市町村や島の位置の確認をした。学習者と親睦を深めたこともあって、1日目よりも落ち着いて進めることができ、学習者の反応を確認することもできるようになった。

実習4日目は、台湾の贈り物の吉凶について、学習者から例を挙げさせ、説明させた。最後の授業なので、学習者からの発話を増やすことを目標とした。全体に向かった質問ばかりしたため、学習者の中でも特定の人のみが発表し、他の学習者の発話を促すことができていなかった。

台湾の実習では、授業の終了後に反省会を行い、各自の反省点や他の実習者の悪かった点や良かった点を話し合った。第3者視点から自分のことを知り、自分では気付か

なかった他の人に対する意見も知ることができた。教育経験の無い私には初めて気がつく点が多く、反省会のたびにいい刺激を受けた。実習が4日連続だったこともあって、自分の反省点を次の授業ですぐに改善することができたことで、前に進んでいることを感じられた。実習中は次の授業のことで余裕がなかったが、授業の相談などによってくれる実習メンバーや先生、授業に真剣に参加し、授業外では一生懸命日本語で台湾の魅力伝えてくれた学習者にとっても感謝している。苦い経験もあったが、とても実りのある実習となった。



4-2. 法文学部4年 田口望

琉大の日本語教育副専攻科目において今年度初の試みである海外実習に、私はこんな機会はないと、迷わず参加することを決めた。しかし実際に実習準備として石原先生のご指導のもと授業内容や教材を詰めていくに当たり、自分の知識や経験のなさを思い知らされることとなった。全く日本語を教えるという立場になかった私には、何もかもが初めてであり、手探りであり、むしろ授業内容というよりも、声の大きさや表情、学習者に対するリアクションなどといった次元からご指導いただくという状況であった。しかし実際に実習が終わると、実習を通して、私自身たった4日間の実習しか経ていないとは思えないほど成長できたと自負している。経験ゼロからの一歩であったという点ではもちろんその一歩が大きく、伸び幅も大きいということで説明がつくかもしれないが、こうして未経験からでも実際に手探りながらも授業をする実習は、得る経験値が大きいと考える。個人差はあれど、日々精進していく姿が、今回の実習生それぞれの授業を見ていてよく分かった。この1週間はもちろん日本語教師に近づくための経験を積んだ実習であったが、授業外での活動も、人生において大変大きな思い出となることだろう。受講生とふれあう時間があったり、台湾高雄市の観光地を案内してもらったりと、教室の中での教師と学習者という壁を越えた時間が、大変楽しかった。こうした、教師と学習者という立場にとどまらない活動も、立場も年齢も近い実習生だからこそ過ごせる時間なのだと思う。

普通体の導入の授業の中で、親しい友達を呼ぶ時には呼び捨てで名前を呼び、普通体で話すという話をした。するとその日から、特に私の世話をしてくれていた受講生が、私の事を呼び捨てで呼び、普通体で話してくるようになった。もちろん教室内では先生と呼ばれ敬語であるが、例えば昼食を一緒に食べている時間や夜市を案内してくれている時間は、常に親しい話し方で接してくれていた。それに気付いた瞬間、この実習に参加してよかったと心から思った。やはり普通に授業を受けるだけでは得られないものを、私は今ここで得ることができたと実感した瞬間であった。自分の日本語教育スキルのみならず、実際に現地に行って初めて得られる人とのつながりや異文化の実感は、今回の実習での大きな利点であったと思う。

海を越えた日本国外で、こんなにも熱心に日本語を学んでいる若者たちがいるということを目の当たりにし、自分も日本語教育に携わって、このような意欲的な学習者たちにもっと日本語を学んでほしいと心から思った。これからの長い学習人生において、大変意味のある1週間となることは間違いない。来年度からも実習があれば、後輩達には迷うよりは是非参加してほしいと思う。何もわからない状態であっても、先生方の熱心なご指導もあり、受講生の笑顔もあり、不安は打ち消されるはずである。我々がそうであったように、最後には達成感が残るであろう。今しかできない体験や今しか感じられない感情が、この1週間に詰まっていた。心から参加して良かった。



4-3. 法文学部4年 宮城彩香

台湾実習を終えて、全体を通して予想していなかった結末と気持ちの変化に自分自身何より驚いている。台湾へ行く前は不安と心配で頭がいっぱいであったが、何気なしに踏み出した1歩が結果として何百倍もの価値を秘めていたことに気づくことができ、帰国後の今は達成感と感謝の気持ちで胸いっぱいである。

私が実習で担当した授業は、1日目：待遇表現（敬語），2日目：読解「沖縄と豚肉料理」，3日目：普通体を使った会話練習，4日目：読解「キジムナー」といった内容で進み、日を追うごとに、自分自身でも授業の中で成長を実感することができた4日

間であった。緊張していたため、時には自分が何を話しているか分からないほど焦ってしまい、楽しんで授業をするまでに至らなかった日もあった。その日の授業を終えた後、ショックで思わず悔し涙をこらえることができなかったが、授業後に学習者の評価アンケートに記入されているコメントを読み、学習者の予想外の反応に励まされ、嬉し涙があふれ出てきたことも今となっては大切な思い出である。実習を通して、実際に授業を体験してみないと気づけなかった自分の長所や短所も知ることができ、それぞれの個性を活かした授業スタイルを模索し展開していくことで、結果としてやりがいのある授業につながるということが、授業をしていくうちに身をもって感じられた。

授業以外でも、文藻大学の受講生たちに夜市に連れて行ってもらったり、翌日には台湾の新技美容室や若者の街「堀江」に案内してもらったりと、学生たちには非常にお世話になった。その中でも印象深い思い出がみんなで夜市に繰り出した晩のことで、屋台で美味しいものを口にしては感嘆の声をあげ、輪投げや射的のゲームをしては歓声と叫び声をあげ、笑いの絶えない、エネルギーに満ち溢れた時間をみんなで共有することができたのは私にとって忘れられない素敵な夜となった。

実習期間中、学習者の日本語に対する意識の高さには驚いた。日本語の学習に対してもそうだが、日本に対する興味そのものや知識の深さには頭が上がらない程であった。授業で学習したことを即座にインプットし、次の瞬間には応用してアウトプットができているのを目の当たりにすると驚きと共に毎回感心させられた。英語を第2言語として学習している私にとって、彼女たちを見ていると、語学の勉強は正に彼女たちが実践していることであると痛感させられたし、同じく語学を学ぶ者として多くの刺激をもらうことができた。また、平均して20歳の学生が日本に興味を持ってきて専門性の高い日本語を習得していることを素直に嬉しく思い、彼女たちの日本語教育の過程に少しでも携わることができたことを幸運に思う。特に今回の実習では沖縄に関する教材を多く使用したが、「琉球に行ってみたい」と言ってくれたのは嬉しかった。

授業では至らないところばかりであったと思うが、それでも楽しく積極的に



授業に参加してくれた学生には心から感謝している。

4-4. 法文学部4年 加納さおり

初日の1限目を担当した。教室の空気を作る重責と実習の高揚感を同時に感じていた一番印象深い授業を振り返る。

はじめに、読解テキストの本文中にある文型・語彙の説明をした。その後、各自で例文を作ってもらい、巡回しながらそれぞれの理解度をチェックした。作った文を發表してもらい、修正が必要な場合は補足説明を加え、よくできていた文には大きくリアクションをとることで、自信を持ってもらえるようにした。実際、受講生には笑顔が見えた。授業の終わり、「日本は台湾から200億円もの義援金をもらいました」数量表現の「～もの」を扱ったところ、「～だけ」の使い方について質問が出た。本来、そのふたつを比較して提示するつもりでいたので、受講生からの絶妙なトスが上がりスムーズに打つことができた。生のインターアクションのおもしろさ、一緒に場を作っていく重要性、そして呼吸が合ったときの喜びを感じた。

実際に受講生の前に立ってみて、石原先生の指導にあった「教案をがっちり固めず、臨機応変に対応できるゆとりが必要だ」ということも実感できた。またそれは、土台となる十分な知識があって、その上に経験を重ねていき実現するものだろうと理解している。

教科書では学べない実習ならではの発見も多くあった。例えば、ひとりの学習者へのリキャスト（S: 安いもあるよ T: そうですね。安いもあるね）を、クラス全体の活動としてとりあげることで参加型の授業になることや、語感（native sense）を形（visible, audible）にして伝える重要性和難しさなどだ。

次に、受講生について感じたことをいくつか述べる。多くの学習者がそうであるように、日本の漫画、アニメ、ドラマをきっかけに日本（語）へ興味をもち始めたという受講生が多かった。彼女たちの使う日本語や話し方でその熱心さがよく分かる。例えば、ある漫画が好きな受講生はその真似をして「～なのです」と文末を結び、ドラマ好きの受講生は「男ってそういうものなの」「～な・も・の」と現実の生活では使わないようなフレーズやポーズを使った表現を使いこなしていた。聞きなれない語や知らない言葉はメモをとって調べると徹底ぶりにも驚いた。教える側には、ドラマやアニメは興味がなくても、学習者とある程度共有できる知識が必要だと感じた。

受講生たちはほとんど不自由なく日本語を使えていた。中級レベルではあったが、

文法のミスは少なくなく、特に助詞にはそれが目立った。それでも、あれ以上に上達するのはなかなか時間がかかるかもしれない。多少の誤用があっても相手に意味が十分に伝わってしまうので、細かい文法を正してもらう機会が少ない。例えば、「大きいほう→大きいほう」、「うれしいの感じがあります」→「うれしい！」など。これらをひとつひとつ正していくのは、話している本人よりも指導する側の努力と工夫が必要で、その役目はネイティブにふさわしいと考える。



授業後：地元のスーパーで、
人気の商品を紹介してくれた。

（いずれも琉球大学法文学部4年生）